

平成 30 年 6 月 10 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2017

課題番号：25300042

研究課題名(和文) ミクロネシアにおける巨石文化の成立と社会複雑化のプロセスを探る考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological Studies on the Processes of the Formation of Megalithic Culture and Social Complex in Micronesia

研究代表者

片岡 修 (KATAOKA, OSAMU)

関西外国語大学・国際文化研究所・研究員

研究者番号：90269811

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,300,000円

研究成果の概要(和文)：ミクロネシア地域は世界的にみても巨石文化が盛行した地域で、本研究はミクロネシアの巨石文化の成立過程とその背景を考古学的に理解することを目的とした。

研究目的を達成するために、グアム島の異なる環境のほぼ同時期のハプト遺跡とアガ・トンガン遺跡の発掘調査を中心に行なった。その結果、AD. 1000の初期段階のラッテ期ではなく、両遺跡ではAD. 1270年以降のラッテストーンが出現したことが明らかになった。また、プレラッテ期とラッテ期間に非連続期間があることが判明した。ラッテ期の遺構数の増加、出土貝類の時期的変化、土器や石器などが示す人口増加や交流と巨石文化の形成との関係について研究を展開した。

研究成果の概要(英文)：The Micronesia region is an area where megalithic culture was prosperous even from a global perspective. The research conducted in an effort to understand the processes of the formation of megalithic culture and social complex in Micronesia.

To achieve the research purpose, excavation surveys were conducted mainly at Haputo and Aga Tongan sites, two sites dated approximately the same but characteristically different environments. Latte stones at both sites were found to be dated not A.D. 1000 but A.D. 1270 and later. Furthermore, there was a discontinuation between the Pre-latte and Latte periods. The increase in numbers of Latte Phase features, temporal changes of excavated food shells, and excavated pottery and stone tools, indicate the population increases, interaction of people between varying regions, and formation of megalithic culture.

研究分野：考古学

キーワード：ミクロネシア 巨石文化 ハプト遺跡 アガ・トンガン遺跡 プレラッテ ラッテストーン ナンマトル遺跡 世界文化遺産

1. 研究開始当初の背景

首長制社会に関する人類学的研究では、墳墓・神殿・巨石記念物などが首長の「権力の表象」として機能し、それが社会の複雑化プロセスのなかで出現することを指摘してきた (Earle 1997)。このような首長制社会を理解するモデルとして、しばしばオセアニア地域の民族誌事例が参照にされている (Friedman and Rowlands 1977)。しかしそれは主に 18~19 世紀に西欧人によって記述された事柄に拠ることが多い。オセアニア地域における先史時代の実証的研究 (Kirch 2002) が展開されてきたが、ミクロネシア地域の考古学研究は不十分であった。

ミクロネシア地域はオセアニアだけでなく、世界的に見ても巨石文化が盛行した地域といえよう。その例として、マリアナ諸島の「ラッテストーン」(写真1)、パラオ島の「モノリス」と「ストーンフェイス」、ヤップ島の「石貨」、巨石人工都市のポーンペイ島の「ナンマトル遺跡」、コスラエ島の「レ口遺跡」など枚挙にいとまがない。これらの多様な巨石文化の間にどのような歴史的あるいは文化的な関連があるかについては現在でも未解明である。しかし、いずれの事例においても、これら巨石記念物は首長の権力の表象として築かれた可能性が高く、類似した社会複雑化のプロセスをたどったことが想定された。



写真1 テニアン島のラッテストーン

研究代表者は 1984 年より、2016 年に世界文化遺産に登録されたミクロネシア連邦の

ポーンペイ島のナンマトル遺跡を中心に、ミクロネシアの巨石文化について研究を推進してきた。また、2009 年から 2011 年まで科学研究費 (課題番号: 21401032) の助成を受け、グアム島の北西海岸に築かれたハプト遺跡の調査を実施した (片岡・Olmo 2012; 山野ほか 2013)。ハプト遺跡は米海軍通信基内に所在し、環境保護区の指定を受けていることからマリアナ諸島でも数少ない開発を免れてきた保存状態が最良の遺跡である。

に所在し、環境保護区にも指定を受けていることから開発の影響を免れてきた保存状態が良好の遺跡である。プレラッテ期 (AD.20-260, AD.650-880) とラッテストーンを伴うラッテ期 (AD. 1290-1490) の炭素年代が得られ、巨石記念物の成立プロセスを解明するにはまたとない事例となった。

2. 研究の目的

本研究は、ミクロネシアに点在する巨石文化の成立過程を社会の複雑化という観点から理解することを目的とした。人口が増加するにつれ、分業や資源再分配などといった社会システムは複雑化し、その調停機能として宗教と政治力と経済力を基盤に権力が生成されることは人類学の研究成果により解明されつつある。その際、巨石文化における巨石記念物は「権力の表象」として重要な役割を果たしたと考えられる。当該地域の巨石文化の成立過程を理解することは、権力の生成という普遍的な人類学的課題を解明するのに貢献を果たすと考えた。

当該地域においては、地域ごとに多様な巨石文化が展開する一方で、いずれの社会も国家形成の前段階である「首長制社会」に相当する社会複雑化をとげている。巨石記念物は社会のリーダーである首長の権力の表象として機能していた。社会複雑化に共通したプロセスをたどりながら、地域ごとの多様な生態的環境に適応する形で、巨石文化の多様性

が顕在化したと考えられる。この「相違点」と「共通点」を踏まえて、社会進化の説明が可能なモデルの構築を目指した。

3. 研究の方法

基本的には(1)資料の網羅的収集、(2)グアム島のハプト遺跡およびアガ・トンガン遺跡の発掘調査、(3)ミクロネシア連邦ポーンペイ島のナンマトル遺跡の現状調査、(4)専門分野(海洋生物学、植物学、地質学、環境科学など)に基づくフィールドワーク、(5)発掘調査により採集された人工遺物(土器、石器、貝製品など)や動植物遺存体(貝殻や魚骨や種子など)や人骨などの分析と研究で構成した。

各地域に残る巨石文化遺跡として、グアム島のラッテ期の遺跡およびポーンペイ島ナンマトル遺跡を選出し(図1)、以下の要領で発掘調査と遺跡現状調査とジェネラル・サーベイを行い、比較研究のための資料収集を行った。

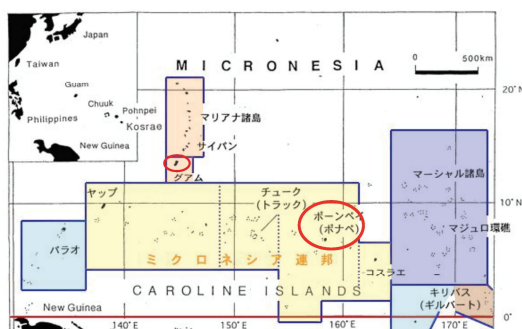


図1 グアム島とポーンペイ島の位置

- (1)平成 25 年度：ハプト遺跡の発掘、ポーンペイ島メチップ地域の踏査と民族調査。
- (2)平成 26 年度：アガ・トンガン遺跡の第 1 次調査、ポーンペイ島ナンマトル遺跡の現状調査およびチェムエン島内の遺跡調査。
- (3)平成 27 年度：アガ・トンガン遺跡の第 2 次調査。
- (4)平成 28 年度：アガ・トンガン遺跡の第 3 次調査、平成 26 年度実施のナンマトル遺跡現状調査報告書の刊行、世界文化遺産登録関

連の啓発活動。

- (5)平成 29 年度(最終年度)：採集資料の整理と分析に基づく発掘調査報告書の作成、ナンマトル遺跡の保護と保存に関する啓発活動、研究成果と情報の公開。

なお、ミクロネシアの巨石文化の諸事例を比較分析し、「地域ごとの相違点」と「地域を越えた共通点」を追求する「総合的比較研究」と、遺跡の研究調査に基づく「仮説検証的事例研究」は並行して進められ、適時フィードバックをおこないながら、研究目的の遂行に努めた。

4. 研究成果

- (1)平成 25 年度

「仮説検証的事例研究」としてハプト遺跡(写真2)の発掘調査を行い、高床式建造物(ラッテストーン)の床下部に設けられた墓跡の発掘調査に加え、6基の建物跡にテストユニットを設定した。炭素年代により、プレラッテ期の居住は AD.130-260 と AD.650-880 の 2 次期に営まれたことが明らかになった。また、ラッテ期を示す AD.1270-1640 の年代は、プレラッテ期とラッテ期の間には連続性がないことを示した。



写真2 ハプト遺跡のラッテストーン

一方「総合的比較研究」として、ポーンペイ島を支配したシャウテレウル王朝の宗教と政治と儀式のセンターであったナンマトル遺跡に関する口頭伝承の収集を行った。また、ナンマトルと関係があったと伝えられ

るメチップ地域のムトコロス島の遺跡踏査を実施し、新たに3遺跡を確認した。

(2)平成 26 年度

「仮説検証的事例研究」では、ハプト遺跡とほぼ同時期の異なる環境に築かれたグアム島南端のアガ・トンガン遺跡の予備調査を実施した。ハプト遺跡との比較研究に最適な遺跡であることを確認した。

また、ミクロネシア連邦ポーンペイ島のナンマトル遺跡(写真3)の現状調査と、シャウテレウル王朝のポーンペイ全島支配構造を理解する目的で、隣接するチェムエン島内の石積み遺構の測量調査を行った。その調査結果は、ナンマトル遺跡内の遺構や島内に築かれた遺構群との関連性と比較研究の良好な資料となった。

ちなみに、ナンマトル遺跡を構成する 100 の人工島のうち、33 人工島と外洋に面した周壁の現状調査で得た情報を、平成 27 年 2 月に提出の世界文化遺産登録の申請書に追加した。



写真3 首長墓が築かれたナントワス島

(3)平成 27 年度

「仮説検証的事例研究」では、マリアナ諸島における巨石文化の形成背景および、北西沿岸のハプト遺跡との比較研究を目的に、平成 26 年度のアガ・トンガン遺跡第 1 次調査の成果を受け、第 2 次調査を平成 27 年 8 月、第 3 次調査を平成 28 年 3 月に実施した。こ

れら二度の考古学調査から得られた以下の成果は、今後の研究の課題と方向付けを明確にした。

聞き書き調査は、後世の土地開発による遺跡の損傷、堆積土の攪乱背景、旧地形の理解を可能にした。

遺跡の南側で自然の落ちこみを確認し、古環境と遺跡の立地関係を明らかにした。

後背地のボアガ丘陵の麓の地形に沿ってラッテストーンを使った高床式住居が構築されていた可能性を示唆した。

地表から約 40cm 下で、プレラッテ期からラッテ期への移行期の文化面を検出した。炭素年代測定により、AD 130-330 (プレラッテ期)、AD 770-900 (移行期)、AD 1300-1660 (ラッテ期)の3時期の存在が明らかになった。

(4)平成 28 年度

アガ・トンガン遺跡の中央に設定したテストユニット1の第II層から、900-770 BCとAD 660-720の炭素年代を得た。前者は今から約 3000 年前の初期プレラッテ期に相当し、グアム島南部沿岸地域における人の居住と巨石文化で代表されるラッテ期への変遷過程を理解する上で重要な資料となった。

また、本年度に実施した啓発および情報公開に関わる活動は、以下の二点に集約できる。

2016 年 7 月の第 40 回ユネスコ世界遺産委員会で、世界文化遺産に登録が決定したナンマトル遺跡に関する啓発活動の一環として、奈良県(2017 年 1 月 31 日-2 月 5 日)と、東京都(2 月 7-12 日)で「世界遺産ナンマトル」と題して写真展を開催した。

世界文化遺産登録申請書の追加資料となった 2014 年に行ったナンマトル遺跡の現状調査の成果報告書を 3 月に刊行し、ミクロネシア連邦およびポーンペイ州政府歴史保存局をはじめ研究者や研究機関への配布を行った。

(5)平成 29 年度（最終年度）

本助成事業の最終年度として、グアム島北西海岸に立地するハプト遺跡を中心に 4 年間のプロジェクトの集大成として、採集資料の整理と分析を行った。また、ナンマトル遺跡について、講演会や学会を通して啓発活動と研究成果や情報の公開を行った。

以下、本研究の課題に関連する成果について記述する。

炭素年代測定から、ハプト遺跡はプレラッテ中期 (AD.20-330)、移行期 (AD. 650-880)、ラッテ後半期 (AD.1270-1640) に営まれた村落であったことを明らかにした。一方アガ・トンガン遺跡は、プレラッテ前期 (770-900 BC.)、プレラッテ中期 (AD.130-330)、移行期 (AD.660-900)、ラッテ後半期 (AD. 1300-1520) の村落であったことが明らかになった。これらの年代は、ハプト遺跡では各時期の間にそれぞれ 320 年と 390 年、アガ・トンガン遺跡では 560 年、330 年、400 年のギャップが存在し、両遺跡に共通してプレラッテ期とラッテ期の間大きな断絶があったことを示した (図 2)。

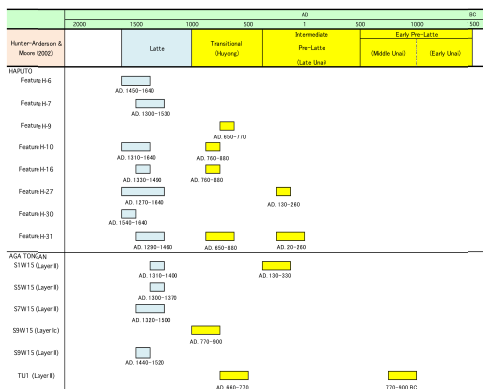


図 2 2 遺跡の炭素年代

気候変動に伴う住環境の変化による村落の移動など、マリアナ諸島の先史村落の形成を理解するための大きな課題提供となった。

ハプト遺跡の発掘調査で総重量 7,000.8g の食用貝類が出土し、4,743 個の同定可能な貝 (NISP) から 2,447 の個体数 (MNI) を算出した (図 3)。その内訳は、36 科、47 属、65 種で、巻貝: 2 枚貝 = 3 : 2 の比率を示した。

アガ・トンガン遺跡は後世の開発により保存状態が悪く、遺物の出土量は少なかった。

ハプト遺跡の出土貝類の時期的な変化をみると、居住地に近い砂底地に生息する *Strombus gibbrulus* や *Quindipagus palatam* などから、礁原縁辺部周辺の *Turbo* spp. や

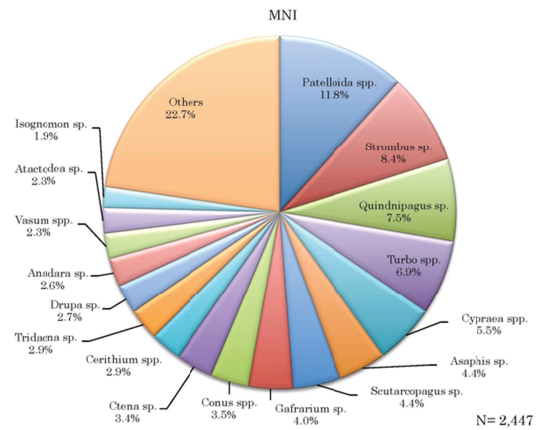


図 3 ハプト遺跡出土貝類の分布状況

Trochus spp. の採取量への増加傾向が認められた。この変化は人口増加が起こったラッテ期の居住者を支える食料貝が、居住地に近い環境に生息する貝類の不足から、より遠方の環境に生息する貝の採取へと活動域を広げた結果であろう。プレラッテ期からラッテ期にかけて村落の人口が増加したことは、高床式建物の床下の石柱であるラッテストーン

の建立の労働量からも推定できよう。ただし、高さ約 5m の巨大なラッテストーンが示すように小型のテニアン島とロタ島と違い、大型のグアム島が首長により統一支配された可能性は低いと考えられる。

ハプトとアガ・トンガン両遺跡から多量の土器片が採集された。それらの内訳は、わずかなプレラッテ期と移行期のものを除き、AD.1270-1640 のラッテ期の土器がほとんどを占めていた。ハプト遺跡では 26 test units の発掘調査から総数 7,695 点、総重量 36,134.0g を得た。両時期の土器の形態は島内の他遺跡と類似している点、石灰岩台地の環境に立地するハプト遺跡周辺には土器用の粘土や石器用の粘土や石器用の安山岩が

存在しない点から、グアム島の南部地域と交流あるいは交易が不可欠であったと考えられる。プレラッテ期まで遡るグアム島内だけでなく、マリアナ諸島の島嶼間で展開された交流ネットワークを通してラッテストーンが伝播したと考えられる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)
Ishimura, T. (2018) Status of UNESCO Conventions related to cultural heritage protection in Oceania. *People and Culture in Oceania* 33: 73-86.

石村智 (2017)「[資料紹介] 田辺尚雄の南洋調査ノート」『無形文化遺産研究報告』11: 115-124.

片岡修 (2017)「ミクロネシアの世界遺産の考古学 -ミクロネシア連邦ナンマトル遺跡を中心に-」『東南アジア・オセアニアの世界遺産と考古学』43-50 頁 東南アジア考古学会.

片岡修・長岡拓也 (2015)「ミクロネシア連邦ポンペイ島のナン・マドール遺跡とシャウテレウル王朝期の遺跡について」『研究論集』101: 69-88. 関西外国語大学.

Kataoka, Osamu, T. Nagaoka and T. Ishimura (2017) *Survey Report on the Preservation Status of the Megalithic Complex of Nan Madol and Sites on Temwen Island, Pohnpei State, Federated States of Micronesia*. Submitted to FSM.

長岡拓也・石村智・片岡修 (2017)「ミクロネシアの巨石遺跡ナンマトルの研究の現状と世界遺産への登録について」『古代学研究』図版第2、68(4): 120-126.

竹中正巳・片岡修・R. K. Olmo (2017)「グアム島中世人の上顎第二大臼歯に現れた臼旁結節の一例」『鹿児島女子短期大学紀要』52: 5-8.

[学会発表](計10件)
石村智 (2018)「オセアニアにおける文化遺産の保護: 近年の動向」日本オセアニア学会第35回研究大会・総会、沖縄海洋博記念公園海洋文化館.

石村智 (2017)「大洋州島嶼国の文化遺産の現状: その脆弱性と可能性」第21回文化遺

産国際協力コンソーシアム研究会「危機に瀕する楽園の遺産」、上智大学.

石村智 (2016)「太平洋の巨石文明の謎を探る」ウインディーグループ・セミナー、南伊豆町役場.

Ishimura, T. (2016) Safeguarding Cultural Heritage from Negative Impacts of Climate Change: A Case Study in Oceania. 8th World Archaeology Congress, Doshisha University.

石村智 (2016)「謎の航海民ラピタ人の交易システム: 海の社会からみる適応戦略」南山大学人類学博物館講座、南山大学.

石村智 (2015)「南のカヌー: 技術複合体としてのアウトリガー・カヌー」第6回海洋考古学会、名古屋大学博物館.

片岡修・長岡拓也 (2014)「ミクロネシア連邦ポンペイ島の調査成果と今後の課題」東南アジア考古学会例会

片岡修・R. K. Olmo (2015)「グアム島アガ・トンガン遺跡第2次調査の成果と課題」東南アジア考古学会

片岡修 (2017)「ナンマトル遺跡世界遺産登録と日本による国際協力」『危機に瀕する楽園の遺産 -ミクロネシア連邦ナンマトル遺跡を中心に-』文化遺産国際協力コンソーシアム研究会

片岡修 (2017)「ミクロネシアの世界遺産の考古学 -ミクロネシア連邦ナンマトル遺跡を中心に-」東南アジア考古学会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 修 (KATAOKA OSAMU)
関西外国語大学・国際文化研究所・研究員
研究者番号: 90269811

(2) 研究分担者

石村 智 (ISHIMURA TOMO)
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・音声映像記録研究室 室長
研究者番号: 60435906

(3) 研究分担者

竹中 正巳 (TAKENAKA MASAMI)
鹿児島女子短期大学・生活科学科・教授
研究者番号: 70264439